

富山売薬ノ沿革

薬学雑誌 1911 年度 43 頁(明治 44 年)

昔、台所に食べ合わせの表が貼ってあった。ウナギと梅干、タニシと蕎麦などがちょっと不気味に描いてあった。富山の薬売りの人が薬箱の中身補充のときに置いて行くものだ。紙風船も懐かしい。当時はどこの家も滅多に病院に行かなかった。

薬誌に(明治時代から見た)富山売薬の歴史が 10 頁にもわたり書かれていた。それによれば、利家のひ孫になる富山藩二代目、前田正甫が疾ありて癒へず。侍臣日比野、丸薬を呈すと、公たちまち癒ゆ。聞くに備前医師の萬代常閑秘伝の反魂丹という。公、常閑を招き、侍臣をして伝習せしめられたり。元禄三(1690)年、正甫江戸にありてある日参勤せらるるや、某藩主急病を発し死に瀕す。満座狼狽するところ、公、懐から反魂丹を出し服用せしめるとたちどころに平癒す。列座の諸侯皆驚き、以後富山の売薬業者をして諸国に行商させることを懇願した。

以後富山の製薬、行商は藩の保護奨励で盛んになってい

く。薬を売っても貧窮なるものからは直ちに金を受け取らなかった。これ、配置売薬の習慣ができた原因という。徴税のため町奉行の監督下にあったが、1764 年には反魂丹役所ができ専門の奉行も置かれた。このころ行商人は 2,600 人あまり、以後増加。明治に入ると家禄を失った士族も売薬に進出し、行商人は 8,000 人を超えた。

しかし、反魂丹は旧慣を墨守し草根木皮でつくるに過ぎざれば、今、泰西文明の技術を入れなくては座して衰退を待つものの如し、と危機感を持つ。そして県内業者共同で製薬会社を設立、調剤所を廣貫堂と称す。その後同種の団体、師天堂、弘明堂、精寿堂など続々できた。彼らは薬学校と同校付属病院の設立も企画する。しかし政府は売薬印紙税を導入。藩政時代と比べて過酷な徴税により売り上げ激減。明治 15 年 9,700 人いた行商人は翌年 6,000 人にまで減少、薬学校どころではなくなった。

それでも明治 26 年には開校。43 年(1910)に県立となる。12 月、県立薬業学校開校式に長井博士が臨席した。このとき売薬同業組合編纂の富山売薬紀要を東京に持ち帰る。それを薬学雑誌が掲載したものが本記事である。

小林 力